

2010 年度春学期授業アンケート・コメント分析

2010 年 9 月 10 日
FD 委員会副委員長
高田 実

はじめに

2010 年春学期のアンケートは、7 月 10 日～23 日の間に実施した。ここで集まったアンケート結果を、8 月 6 日に各教員に配布し、それに対するコメントを 9 月 6 日締切で回収した。以下、教員コメントについての分析を行う。

全体について

(1) 回収率について

表 1 から明らかなように、全体の回収率は、受講登録者比で 57%であった。この低い数字の原因は、座学の回収率の低さ(46%)にある。もちろん、登録者と受験者(最後まで講義に出続けた学生の数)の比率の差を考慮すべきであるという声もあるが、座学でも、登録者比 80%以下の科目はあまりなく、主要な原因をそこに求めるべきではない。

この回収率の低さは、日頃授業に出席している学生の数の少なさを反映していると考えられる。

	受講者数	回答者数	回答率
全体	20446	11670	57%
座学	14663	6785	46%
英語	2891	2438	84%
中国語	756	611	81%
朝鮮語	285	255	90%
日本語	133	127	95%
フランス語	68	59	87%
ドイツ語	63	46	73%
コンピュータ実習	525	456	87%
スポーツ実践	511	425	83%
基礎演習	497	419	84%
教養演習	32	31	97%

(2) コメントについて

コメントの回収率は、常勤教員 83%、非常勤教員 76%であった。回答いただいた中身は、いずれも真摯なものであった。また、後述のようにアンケート方法自体についての意見も含まれていた。

主要な問題点について

今回のアンケート・コメントを通じて明らかになった問題点のうち、もっとも顕著であったのは、次の3点であった。

(1) 学生の学力低下と格差の拡大

学生の学力低下と学力格差への対応の難しさを指摘する声多かった。とくに授業の難易度、進度の受け止め方について、同じ授業ににもかかわらず学生の間での感じ方の違いが歴然としているようだ。昨年と同じ方法で授業したにもかかわらず、「難しすぎる」「早すぎる」と答える学生が増えており、明らかに学生の理解度、満足度が低下している。あるいは、同じ授業に対して、「とてもわかりやすかった」と答える学生だけではなく、「やさしすぎる」と感じている学生と、「わかりにくかった」・「説明をていねいにしてほしい」と答える両極端の学生がいる。これらの事態(の変化?)への戸惑いが看取される。あるいは、先生からすると、「学生が演習科目に求めていることが低レベルになってきているのではないか」と感じることもあるようだ。少人数の授業でも「学生の二極化」への対応が難しいという指摘がなされていた。

(2) 学生の出席率の低下と受講態度の変化

学生の出席率の低下、遅刻の恒常化についての危惧が寄せられている。講義科目では3割程度しか出席していない科目もあるようだ。とくに、ゼミの報告時に無断欠席する学生が多くなっていること、それが基礎演習でも起こり始め、今後が不安であるという指摘がなされている。

また、出席をとるから授業には出ているが、授業内容に集中していない学生が増えたとの声も記されていた。とくに、こういう学生が後ろの方で私語を交わす、あるいは携帯電話をいじっていることの問題点が挙げられていた。

出席確保の方法については、「出席をとるべきだ」、「大学だからそれは相応しくはない」など、さまざまな意見が記されていた。理想的には、学生が自ら学ぶ姿勢をもって授業に自発的に出席すべきであり、教師は学生の知的関心をひき続ける最善の講義を行うべきである、ということにはまちがいはない。しかし、学生の意識の変化を前提とする時、学生が自ら学ぶようになるための方法や、その中で授業への出席が果たすべき役割がどうあるべきかについては、議論すべき時期に来ているのではなかろうか。

(3) 自主学習の不足

今回のコメントの中で圧倒的に増えているのが、学生の自主学習の不足である。講義科目についてはある程度予想できる範囲であるが、演習や語学についてもこの問題が大きくなっていることは看過できない。語学関係のある非常勤講師の先生は、宿題を課したり、小テストをこまめに実施したりする工夫をしているにもかかわらず、常時予習・復習をしている学生がクラスでひとりもいなかった事実には衝撃を受けておられた。また、上記のようにゼミでも発表時に無断欠席したり、発表のための準備をしてきていない学生を出始めている。もちろん、少人数の授業やゼミなどで、逆に全員がよく予習してくるので、充実した授業ができているというクラスが、数は少ないとはいえ、ないわけではないことも事実であり、この両面を認識しておく必要がある。

要は、学生の多様化にどのように対応するか、その方法について、われわれの認識をより深める必要がある。学びの方法を含め、われわれが学生の実態をよりよく観察し、細かな指導をしていくことで、彼らの知的関心を高めていく以外にはないであろう。そのためには、個人で努力するだけでなく、科目群、学科などの単位で教授方法の改善について、細かな情報と意見の交換を行っていくべきであろう。

授業方法について

このような大きな問題があるのは事実であるが、教員の側も手をこまねているわけではない。学生の変化に対応して、さまざまな教育改善の試みもなされている。これについて、教育効果が高いと書かれている方法を中心にまとめておきたい。

(1) 学生の評価の高い、あるいは教育効果の高い方法について

1 学生とのコミュニケーションが取れる授業

前回の授業終了時に質問や意見などを学生に書いてもらい、次回の授業の冒頭でそれに対して丁寧に対応する・説明する、あるいは要点を再確認してから、次のテーマに入るといった方法については、高い教育効果があるようだ。教員の側からすると学生はどこがわかっていないのかを把握できるし、学生の側からすると、大人数での講義でも、「自分の疑問や意見を取り上げてもらってうれしかった」と感じるようだ。その意味での学生・教員間の一種のコミュニケーションが実現している。

ひとつだけ例を示せば、次のよう記述が参考になる。

「毎回の授業で書いてもらったリアクションペーパーを評価する声が圧倒的に多かった。リアクションペーパーは「1 今回の授業の理解度(選択式)」「2 教員からの質問に教えてください(毎回、課題が異なる)」「3 今回の授業を受けて思ったことを記してください」という3項目から成り、平常点として成績に反映する(20点分)。寄せられた質問のなかから何点が教員がピックアップし、次回の授業時に紹介する、または質問に答える。このことを通じて、質問がしやすい、ほかの受講生の考えが聞けて授業の理解が深まる、という意見が多くみられた。」

2 具体的イメージがつかめる教材の使用について

教材としては、具体的なイメージを描きやすい教材を使っている授業への評価が高いようだ。視聴覚教材、現物資料をうまく使っている授業、現場の人の声を直接聞ける授業、具体的な事例を描いた資料をたくさん使った授業に学生は関心をいただいているようだ。

3 学生参加型の授業について

とくにゼミなどで、学生自らが司会をしたり、グループ学習を導入したりしつつ、彼らが自分たちで授業をつくっているという意識をもてるような授業は成功しているようである。また、留学生と日本人学生の交流がうまくいったゼミでは、国際化に対応したより充実して授業展開が実現しているようである。教員と学生だけではなく、学生同士のコミュニケーションの改善が、授業を円滑にする方法であることを指摘する声が多かった。

また、あるコメントには次のようなユニークな指摘があった。

「学生が自分から発言する」ということにこだわりすぎず、逆にドンドン質問を浴びせて、結果的にたくさん話せるよう仕向ける。学生受け応えを否定しない。

(2) 改善すべき項目について

1 板書を見やすく、話をわかりやすく

板書、話し方、声の大きさなどの基本事項については、依然として学生の要望が多いようだ。多くの先生がコメントされていた。なかには、熱心に板書の改善をされ、パワーポイントを用いた授業を行ったにもかかわらず、あまり学生の評価があがっていない事例についても苦悩が表明されていた。教育の技術の面では、相互に助言しつつ効果ある方法を模索する必要がある。

2 ノートの取り方について

学生からするとノートの取り方が難しいようである。しかし、そのために時間をとると授業が進まない。1と関連して、教員の側でわかりやすく板書することは必要であるが、同時に、ノートの取り方について、初年次教育の段階でしっかりと身につけさせることが必要なようである。

3 静謐な授業環境の維持について

教室での私語の多さ、あるいは授業中の携帯電話の操作については、多くの指摘があった。教員の注意が必要ではあるが、それには限界がある。それ以上に意識の改善をしなければ、どうしようもないであろう。

これに関連して、気になる表記があった。学生の自由記述の中に、「教員の中にも講義中に携帯を取り出している人がいるので、それをやめて欲しいし、そうでないと学生に対して一方的に注意するのはおかしい」という記述があったというのだ。「講義中には教員も携帯を出さない(時計代わりであったとしても)」という合意があっても良いのではないかと思う」という意見や、携帯使用について教員が意識してみんなで注意していく必要があるのではないかという指摘があった。

制度にかかわる項目について

(1) 語学の人数が多すぎるのではないか

語学の授業では、科目によっては60名近いクラス規模となっているところもあり、それが多様化した学生への対応を難しくしている。

(2) 巨大規模クラスの解消を

前回のFD・SDニュースでも指摘したように、座学については、クラス規模の格差が大きい。とくに、今回は600人を超えるようなクラスも現れており、それに対しては学生と教員双方から痛烈な不満が記されている。時間割の配置やクラスの分割など早急な改善が求められる。

(3) 基礎演習の通年化について

初年次教育の中心を担う基礎演習については、教えるべき項目のわりには時間数が少なく、スムーズな導入教育を実現するためにも、通年化すべきではないかという声が複数寄せられていた。

(4) 科目間の連携の改善と科目の2単位化について

専門科目の間での連携を高めるためには、いくつかの基本科目の履修を前提として、より高次の科目が履修されなければならないが、制度的にそれが実現できていない。4単位科目の2単位分割も含めて、この制度的な保障をすべきであるという声が複数寄せられた。また、同じ科目間での教育内容について、一定の連携が必要ではないかという声もあった。より細かな科目群単位で、授業内容の連携とそのための方法を詰めていく必要がある。

(5) ふりがな付受講者名簿の作成について

技術的な点では、受講者名簿にふりがなをつけてほしいという要望があった。他大学でも実用化され、難読氏名などの確認のための時間が節約でき、学生の名前をまちがえないことで学生とのコミュニケーションがうまくいくとのことであった。

V アンケートのとり方について

アンケートのとり方についてのご意見もあった。

(1) 教員の「熱意」は計れるのか

アンケート項目について、教員の「熱意」を聞く項目があるが、教員としては熱意をもって授業していても、学生からするとそうとらえられていない場合がある。あるいは、「熱意」というあいまいな項目を評価できるのかという意見があった。

(2) 学生のコメントはどこまで正確か

上記の学生の多様化を反映して、とてもまじめに授業に出て書いているようではない内容のものが、これまでに比べて多くなっている。取り上げるべきコメントとそうでないコメントとの差異化が必要である。

(3) アンケート時期について

次のようなコメントがあった。

「人数が少ないと評価が高くなるが、その反対に多いと評価が低くなる。この場合、アンケートの実施が最終講義に近いと、授業に出てきていない学生が勝手なことを書くことの危険性がおおきいので時期を考えるべきではないか」。

おわりに

眼前に進行する学生の多様化は、社会のあり方の変化を表している。われわれは、最高学府としての大学の理念を失うことなく、しかしこの変化する現実に対応して、大学教育の具体的な目標とそのための方法については、新しい途を模索していくしかないであろう。

当面は、本学における学生の実態を把握しつつ、 で掲げた三つの問題に対して、各教員がそれぞれの分野で新たな試みを行い、その成果を交流しつつ、大学全体として実行可能な集団的方法を確立していくしかないであろう。

また、これらの問題点を解決するための教育方法の改善にあたって、制度上の改革が必要であれば、その課題に取り組むべきであろう。